

野付湾におけるゴマフアザラシ *Phoca largha* 個体数の季節的変動

後藤 真美子^{1*}・石川 聖江¹・河口 真梨¹・石名坂 豪²・森田 正治¹

1. 086-1645 北海道野付郡別海町野付 63 番地, 野付半島ネイチャーセンター内, (株) 別海町観光開発公社 2. 086-1822 北海道目梨郡羅臼町湯ノ沢町 6-27, 知床世界自然遺産・知床国立公園羅臼ビジターセンター内, (財) 知床財団羅臼地区事業係

Seasonal Population Fluctuation of Spotted Seal *Phoca largha* in Notsuke Bay, Hokkaido

GOTOU Mamiko^{1*}, ISHIKAWA Satoe¹,
KAWAGUCHI Mari¹, ISHINAZAKA Tsuyoshi² & MORITA Masaharu¹

1. Betsukai-cho Development of sightseeing corporation & Co. Ltd., 63 Notsuke, Betsukai, Hokkaido 086-1645, Japan. *gotou-m@maroon.plala.or.jp 2. Rausu Branch Office, Shiretoko Nature Foundation, 6-27, Yunosawa, Rausu, Hokkaido 086-1822, Japan

はじめに

ゴマフアザラシ *Phoca largha* は日本で観察されるアザラシの仲間でも数多く観察される種である (伊藤 2005)。通常, 本種は北海道では冬季に観察されることが多いが, 北海道東部の野付湾では夏季にも観察されることが知られている (青木 1996)。ここでは 5–10 月に尾岱沼港–トドワラ間で観光船が運航され, 頭数の多くなる 8 月にはアザラシウォッチングも行われているが, 近年は正確な頭数が報告されていなかった。そこで, 野付湾におけるゴマフアザラシの最新の生息状況および生息頭数の季節変化を明らかにすることを目的として, 本調査を実施した。

調査方法

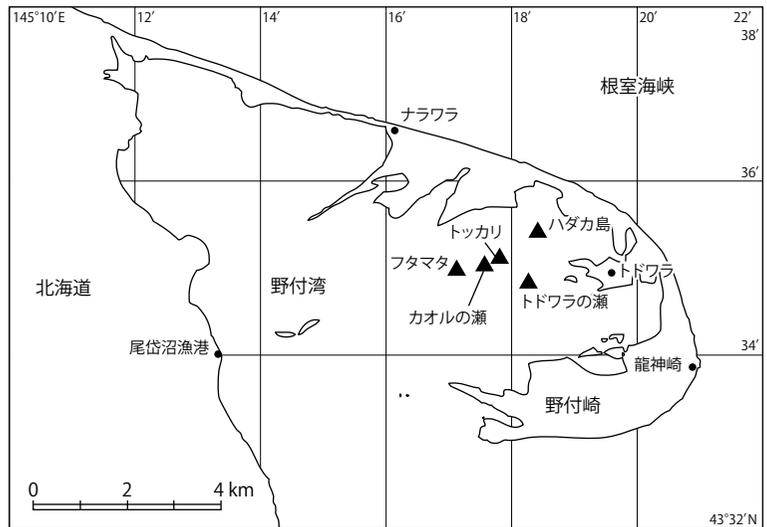
調査地は北海道東部, 知床半島と根室半島のほぼ中間に位置する野付半島の内海, 野付湾である。野付湾は水深が浅く, ほとんどの場所が 0.3–1 m ほどである。例外は観光船の航路となっている潮切り (滞) で, ここは水深が 5 m ほどある。野付湾には海草の一種であるアマモ *Zostera marina* が豊富に自生し, ホッケイエビ *Pandalus latirostris* や小魚などの生息場所となっている。

調査は 2007 年 6–10 月には週 1–2 回程度, 2008 年 6–10 月には週 1 回程度行った。尾岱沼港–トドワラ間を運航する観光船に乗船し, 調査者 1 名が船から 8 倍の双眼鏡を用いて確認できる範囲のアザラシを遊泳個体と上陸個体とに区分して全てカウントした。本文中の確認頭数は, 遊泳個体と上陸個体を合わせた頭数である。

また, アザラシの頭数と潮位との関係を調べるため, 例年上陸頭数が多いとされる 8 月の調査記録を抽出して, 潮位との比較を行った。なお, 比較にはトッカリにおける上陸頭数を用いた。潮位は海上保安庁ウェブサイト <http://www.kaiho.mlit.go.jp/01kanku/> の尾岱沼の潮汐推算データを引用した。

アザラシをカウントした際の船の位置 (緯度・経度) を GPS により記録した。さらに, アザラシの発見が集中した場所 5 箇所 (図 1), すなわち, (1) トッカリ, (2) トドワラの瀬, (3) カオルの瀬, (4) ハダカ島, (5) フタマタについて, 2007 年 6–9 月の調査記録から, アザラシの確認が集中する場所の推移を分析した。なお上記の名称は地元漁業者が呼んでいるものをそのまま使用した。

図1. 調査地、アザラシの発見が集中した5箇所(▲)の名称は地元漁業者が呼んでいるものをそのまま使用した。



結果

1. 確認頭数の変化 (2007年)

図2-aの通り、月ごとの最大確認頭数は6月に7頭(調査回数=9回)、7月35頭(8回)、8月54頭(14回)、9月55頭(7回)、10月7頭(2回)であった。6月13日に1頭が初めて確認されて以降、6月中は10頭未満しか確認されなかったが、7月中旬

から数が増えてきて、最高で55頭が9月9日に確認された。9月下旬より確認される頭数は減少し、9月22日以降は調査最終日(10月15日)まで再び10頭未満となった。

比較的頭数の多かった期間(35頭以上がコンスタントに確認された期間)は7月下旬-9月中旬であった。

また、8月28日、29日、9月9日に確認されたアザラシの中には、ゼニガタアザラシ *Phoca vitulina stejnegeri* 1頭が含まれていた。

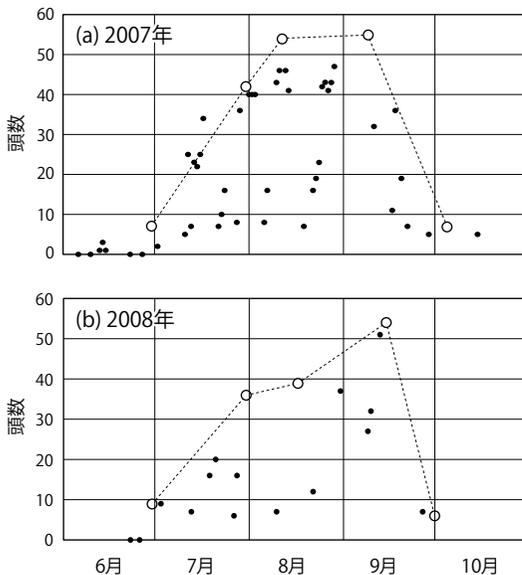


図2. 野付湾内におけるアザラシの確認頭数。確認頭数は遊泳個体と上陸個体を合わせたもの。白抜きの丸は各月の最大確認頭数。a: 2007年。b: 2008年。

2. 確認頭数の変化 (2008年)

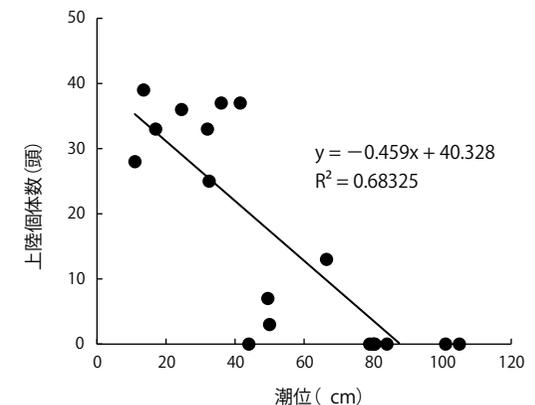


図3. トッカリにおけるアザラシの上陸頭数と潮位の関係。

図4. 2007年6-9月のアザラシ分布場所の推移.

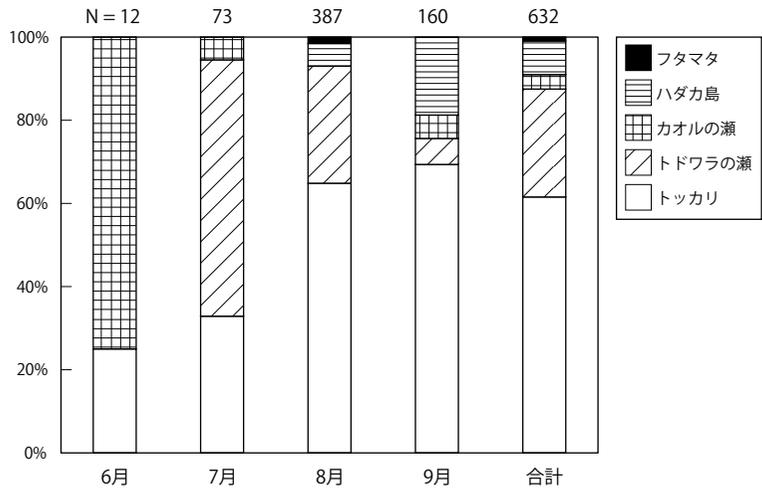


図2-bの通り、月ごとの最大確認頭数は6月が9頭(調査回数=3回), 7月36頭(7回), 8月39頭(4回), 9月54頭(5回), 10月6頭(1回)であった。2007年と同様に, 7月中旬以降に確認頭数が増加したが, 前年と異なり8月に入っても40頭未満のまま推移した。2008年の最大確認頭数は54頭(9月15日)であった。そして, 9月下旬より確認される頭数は大幅に減少した。比較的頭数の多かった期間(35頭以上がコンスタントに確認された期間)は7月下旬-9月中旬であった。

また, 8月31日, 9月9日, 15日に確認されたアザラシの中には, ゼニガタアザラシ1頭が含まれていた。

3. 上陸頭数と潮位の関係

図3の通り, 潮位が低いときほど, アマモ場の上陸するゴマフアザラシの頭数が多い傾向が認められた。また, 潮位11.0-41.5 cmまでは頭数に大きな変化は認められなかったが, 潮位41.5-44.0 cmの間で, 大幅な上陸頭数の減少が認められた。潮位44-79 cmの間では, 10頭前後の上陸個体が認められ, 潮位79 cmを超えると上陸個体はまったく確認されなかった。

4. 集中場所と利用頻度

2007年6-9月を通しての累積確認頭数は632頭であり, 最もアザラシが集中していた場所はトッ

表. 2007年6-9月の各分布場所におけるアザラシ確認頭数の累計.

	6月	7月	8月	9月	合計
トッカリ	3	24	251	111	389
トドワラの瀬	0	45	109	10	164
カオルの瀬	9	4	0	9	22
ハダカ島	0	0	21	30	51
フタマタ	0	0	6	0	6

カリ(計389頭, 62%)であった(表)。次いで, トドワラの瀬(計164頭, 26%)であった。すなわちこの2箇所では, 2007年6-9月の確認頭数の90%近くを占めていた。

各月ごとでは, 6月はカオルの瀬(計12頭, 75%), 7月はトドワラの瀬(計73頭, 62%), 8月および9月はトッカリ(計387頭, 65%および計160頭, 69%)へと, 分布の中心地が移動していた(図4)。

なお, ハダカ島においては8月に初めて上陸が確認され, 9月にはトドワラの瀬を越える頭数(19%)が確認された。

考察

1. 確認頭数の変化

野付湾におけるゴマフアザラシの過去の生息頭数については, 夏から秋にかけて最大約80頭で推移し, 12-1月の野付湾が結氷する直前に個体数が

再び増加して100頭を超すことが報告されている(青木1996)。本調査においては2007、2008年ともに7月下旬-9月中旬に最も確認頭数が多かったが、最大で54-55頭と、80頭には至らなかった。地元漁業者の話でも、ここ数年観察される頭数が少なくなっているという。しかしこのような生息頭数減少の原因は明らかではない。また調査期間外になるが、2008年1月7日には湾内に張った氷上で休むアザラシ121頭が確認されている。

また8月の確認頭数が2007年は平均的に40-50頭前後であったのに対し、2008年は最大でも30頭台であった(図2)。全調査期間を通じた最大確認頭数は両年ともに9月で大きな変化は認められない(2007年:55頭,2008年:54頭)ため、8月の野付湾内の食物資源量が2008年の方が少なかったか、風蓮湖や国後島のケラムイ岬など、周辺のゴマフアザラシ生息地における食物資源量がより豊富であった可能性が考えられるが、さらなる分析が必要である。

なお、2007年の調査結果では、9月下旬より確認頭数が急激に減少しているが、同年に同様の調査を実施していた守川(2008)によると、9月下旬に最大で31頭、10月中旬に最大で21頭が確認されていた。

7-9月に周期的な頭数の増減が認められたが、これは干潮時の方がアザラシの上陸頭数の割合が高いという報告から(Bradford et al. 2005)、潮の干満に関係する可能性が高い。すなわち、干潮に近ければ上陸している確認頭数が多くなり、満潮に近いときは頭数が少なくなる傾向があると考えられる。

2. 上陸頭数と潮位の関係

野付湾内にいるアザラシの頭数が比較的安定しているとされる8月のデータを抽出して、上陸頭数と潮位との関係を検討した。潮位が低ければ、アザラシが上陸できるアマモ場の面積が広がるため、上陸頭数が多くなることが予測されたが、図3のとおり、潮位41.5-44.0 cmの間で大幅な上陸頭数の減少が認められた。さらに、潮位79 cm以上では上陸個体がまったく確認されなくなった

ことから、野付湾内においては40-80 cm程度の潮位でアマモ場が完全に水没し、アザラシにとって上陸可能な場所がなくなるものと考えられた。図5は、潮位41.5 cmの時に上陸しているゴマフアザラシの状態である。体幹部は水面下となっており、体を反らせて吻端を含む頭部と尾部から後肢を水面上に出していた。

3. 集中場所と利用頻度

6月は他の月に比べてカオルの瀬のアザラシによる利用頻度が高くなっていったが、アザラシの確認頭数自体が同月は少なかったことに注意が必要である。7-9月に利用頻度が高かったトッカリとトドワラの瀬は、干潮時に広大なアマモ場が海面上に現れていたため、アザラシが上陸して休息するのに適した場所であると考えられた。このことから調査期間全体を通して上記2箇所に分布が集中したものと考えられる。

なお、調査開始前に観光船の船長より聞き取りを実施したところ、干潮時はトッカリ・トドワラの瀬に多く、満潮時はカオルの瀬にアザラシの分布が多くなるとのことであったが、本調査ではデータ数が十分でないため、潮位によって場所ごとの利用頻度が変わるのか否かまでは明らかにすることができなかった。

謝辞

観光船における調査では、山崎強船長をはじめとする、(株)別海町観光開発公社別海町観光船職員、富崎清美船長、伊達省三郎船長、坂下富喜子氏には、現地調査や情報提供等において、多大なるご協力をいただきました。また、(株)別海町観光開発公社職員、内藤訓氏には調査において便宜を図っていただきました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 青木則幸. 1996. ゴマフアザラシ. 日高敏隆(監), 日本動物大百科2. pp 98-99. 平凡社, 東京.
Bradford A. L. & Weller D.W. 2005. Spotted seal haul-out patterns in a coastal lagoon on Sakhalin Island,

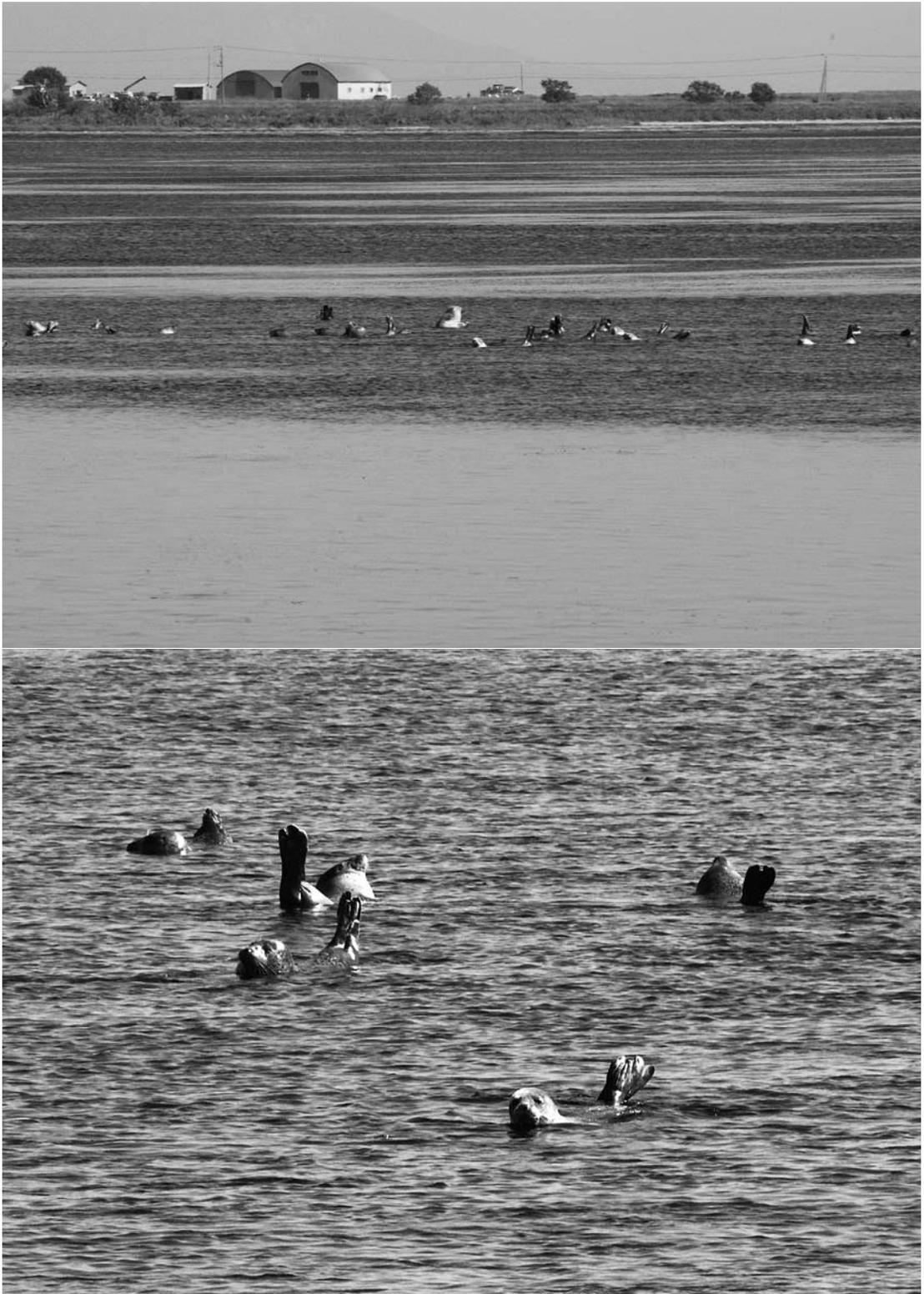


図5. アザラシ上陸個体, 2007年8月29日8時25分, 潮位41.5 cm, 上: トッカーリにて37頭確認, 下: 体を反らせ頭部と尾部から後肢を水面上に出している。

- Russia. Mammal Study 30: 145–149.
- 伊藤徹魯. 2005. ゴマフアザラシ. 阿部永 (監), 日本の哺乳類 改訂版, p 104. 東海大学出版会, 神奈川.
- 守川祐未. 2008. 野付半島におけるゴマフアザラシの生態: 野付半島の個体数変動と過去との比較. 13 pp. 東京農業大学動物資源管理学研究室 卒業論文.